

学びをいかして、日常生活をよりよくしていこうと工夫し創造する子ども

— 小学5年「手ぬいでつくろう！生活に役立つ小物」の実践から —

1 題材のねらい

手縫いの技能の定着を図るとともに、布を用いた製作活動に対する興味関心を高め、生活をより豊かにするためにどのような物を作ればよいか考え、日常生活でも実践しようとする態度をはぐくむ。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

以下に示すのは、「家でも作るぞ！おいしいゆで野菜サラダに挑戦」の題材の最終時、家庭での実践を視野に入れた計画を立てた後のふりかえりである。

- ・家族が好きな物が分からなかったので、弟がきらいなトマトを入れないようにして、弟が食べられるようにしました。 (児童A)
- ・今日は、たくさんの工夫が出てすごいと思いました。特にすごいと思ったのは、ゆで具合の工夫でした。弟のためにやわらかめにゆでて、家族に合わせた工夫をしていきたいです。 (児童B)

この題材で子どもたちは、野菜のゆで方を身に付けるために、ゆで野菜サラダに挑戦した。3回の実習などこれまでの学習をいかして、各家庭で作る計画を子どもたち全員が考えた。はじめはとにかくおいしいサラダを食べてもらいたいという思いから、材料の組み合わせにこだわる子どもが多かった。しかし、家族のためにどのようなサラダを作るとよいかという視点で話し合いを進める中で、児童Aのように、自分の好みだけではなく家族の好みに応じた食材を選ぶと、より喜んでもらえるのではないかということ、さらには児童Bのように、家族の実態に応じて、切り方やゆで加減を調節することでよりおいしく感じてもらえるのではないかという考えに至った。このように、学んだことを具体的にどのようにいかしていくか、自分の家族構成や家庭の実態を踏まえて考えることで、より豊かな家庭生活を営むために、主体的に関わっていこうとする態度を育てていきたいと考えた。

本題材では、布を用いた製作活動を手縫いで行う。本題材に入るまでの裁縫の経験は子どもによって様々で、針や糸に触れたことのない子どもから、自分一人で簡単な小物を製作できる子どもまで差がある。経験の少ない子どもたちは、練習布を用いた基礎縫いの学習において若干の抵抗感を示していたものの、くり返し練習することで、手縫いの基礎を身に付けつつある。一方では、技能が上達していくことで、裁縫の楽しさを感じながら身に付けた技能を活かして、生活の中で使える物を作りたいという思いが高まっており、製作活動に対して意欲を高めている。子どもたちには、製作活動を通してくり返し経験させることで、手縫いに対して自信を付けさせ、そのよさを感じさせると共に、布を用いた製作活動においても、ゆで野菜サラダの学習を通して学んだことをいかした姿のように、学習を通して身に付けた技能を日常生活にいかそうとする意欲や態度をはぐくんでいきたいと考えた。

(2) 本題材の内容と技術・家庭科で考える思考力・判断力・表現力の育成と関わりについて

本学校園技術・家庭科では、日常生活をより豊かにするために自らの課題を見いだし、学習で身に付けた基礎的・基本的な知識や技能を用いながら、その課題の解決方法を仲間とともに工夫したり、考えを練り上げたりする姿を目指している。このような学び合いを通して、生活を工夫し創造

する能力を高めることが、思考力・判断力・表現力を育てると考えている。

本題材では、手縫いの技能を用いて生活に役立つ小物を製作する。子どもたちはこれまでに、糸通し、玉結び・玉止め、なみ縫いや返し縫いなど、手縫いの基礎を学習してきた。日常生活において、ボタン付けや補修など手縫いの技能を用いる場面は多い。加えて、安価で良質な布製品が手に入りやすい昨今ではあるが、製作活動を通して、形や大きさ、布のデザインなど好みや目的に応じた物が作られることは、生活がより便利になったり、楽しい雰囲気づくりができたり、家族との絆を深めたりするなど、より豊かな日常生活を送るために重要な要素である。また、生活に役立つ小物作りは、さらに大きな物の製作や身にまとう物の製作、中学校での被服の製作につなげるための裁縫の基礎として位置付けているものである。

本題材の構成にあたっては、以下の2点を大切にしていきたいと考えた。

- 手縫いの経験を多く積ませることで、基礎的・基本的な知識や技能の定着を図ると共に、裁縫に慣れたり、生活に役立つものを作り上げたりすることで達成感を味わわせ、そのよさを感じながら家庭で実践していけるようにする。
- 家庭でのよりよい暮らしにつながる課題を見付け、解決に向けた話し合い活動を通して、身に付けた知識や技能をいかしながら、自らの家庭の実態に即したより豊かな生活を工夫し創造する能力を育てる。

子どもにとって、「できた!」や「わかった!」といった達成感を味わうことが、家庭での実践における最大の原動力となる。限られた時間の中ではあるが、多くの経験を積み、自信を付け、手縫いのよさを感じさせることが重要だと考えている。さらに話し合うことで、友だちの様々な考え方に触れたり、課題の解決に向けて追求したりすることができ、自分の家庭生活をより豊かにするアイデアが広がっていく。これらの視点を題材に盛り込み、目指す子どもの姿に迫ることとした。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

上記の2点を踏まえ、本題材では、以下のように授業を展開した。

第1次では、生活に役立つ小物という視点で、自分の作りたいものを計画し、製作した。計画するにあたって、まず、身のまわりにある布を用いて製作されているものを調べる。手縫いではなくミシン縫いによって製作されている場合もあるが、生活の中には布を用いて製作されているものに囲まれていることや、それを使ったり、身に付けたりすることで生活がより便利になったり、豊かになったりしていることを感じさせ、それが、製作への意欲にもつながると考えた。

次に、調べたものを参考にしながら、製作に向けて計画を立てていく。「生活に役立つ」という視点の小物作りの計画だが、ここで“役立つ”とは、便利であるだけに限らず、マスコットなど、あることで自分や家族が楽しくなったり、癒されたりと、生活をより豊かにできるものも含めた。計画に際して、ランチマットを入れる巾着袋を例に、どのように製作していけばよいか学級全体で考える中で、布の形や大きさはどのようにするとよいか、布の材質はどのようなものがよいか、縫う位置や縫い方など、作り方を探っていった。この巾着の作り方を参考にしながら、自分の作りたいものの計画を立て、それに沿って製作した。

第2次では、これまでの学習をいかして、家族にとって生活に役立つ小物の製作の計画を立てる。まず、製作上の課題を明らかにするために、第1次で作った物を見たり、実際に使ったりすることで、ワークシートに良かった点や改善点をまとめ、工夫する視点を明らかにしておく。そうすることで、これから計画を立てる際によりよい物を作ることに役立たせていきたいと考えた。そして、第2次では家族にとって役立つ物という視点をもたせながら、計画を考えさせていくことで、日常生活にいかしていこうとする態度や意欲を高めていきたい。

最後は、家庭での実践に向けて計画を立てる場である。なぜそれを作るのか、家族への思いや製

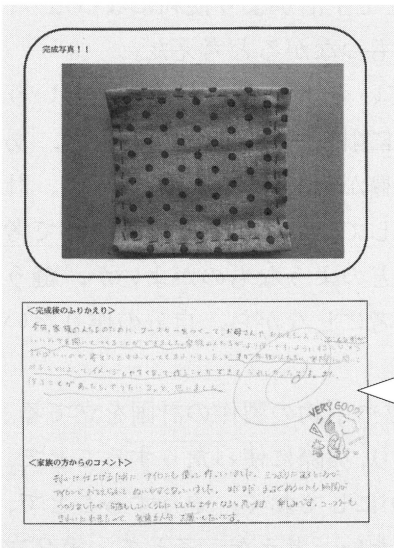
作物との関わりなどをしっかり考えることを大切に、家庭での実践への態度や意欲につなげたいと考えた。計画を立てる際には、第1次で自分が立てた計画や、友だちの計画を参考にしながら、なぜ形や大きさ、縫い方手順などの計画したことの理由を掘り下げながら根拠を明らかにしながら考える。また、よりよい計画が立てられるように、これまでの学習の成果を価値付けながら、上記の視点に添って学級全体で話し合ったり、個々に声をかけたりしていくことで、思考力、判断力、表現力を高めていきたいと考えた。そのための手立てとして、これまでの製作品や計画を振り返られるようにワークシートを工夫したり、教室内に展示したり、授業では製作時間を設けないが、実際に用いる布を準備したりするなど、日常生活で実践するイメージを具体的にもてるような環境を整えた。

3 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学び合い）
1	生活に役立つ小物を作ろう。	1 2・3 4・5	・生活の中で使われている布製品を調べ、自分が作ってみたい物を考える。 ◇ランチマットの入る巾着袋を例に、形や大きさをどうすればよいか、どこをどのように縫えばよいかなど、作り方を学級全体で考え、それを参考にしながら作り方の計画を立てる。 ・計画した小物を手縫いで製作する。
2	自分の家族にとって生活に役立つ小物を作るための計画を立てよう。	6 7	◇自分が作ったものを実際に使ったり、飾ったりして、その感想や改善点を学級全体で共有しながらまとめる。 ◇各家庭で、生活に役立つものが何か調べ、前時にまとめた改善点やこれまでの学習をいかしながら製作の計画を立てる。

4 授業の実際

以下に示すのは、題材終了後、計画した小物を各家庭で作った感想と家族からのコメントである。



＜児童Cのふりかえり＞

今回、家族のために、コースターをつくって、お母さんやおねえちゃんにどんな形がいいのかを聞いてつくることができました。みんなが、より使いやすいようにするには、どうすればいいのか考えたときにはとってもまよいました。ですが、実際に聞いてみることによってイメージしやすくなって作ることができてうれしかったです。また、つくることがあったらやりたいなあと思いました。

＜家族からのコメント＞

きれいに仕上げるためにアイロンを使って作っていました。三つ折りにするところがアイロンでおさえられていてぬいやすくなっていました。まだまだまっすぐぬうのにも時間がかかりましたが、何度もしていくうちにどんどん上手になると思います。楽しみです。コースターもきれいにできたので、家族5人分お願いしたいです。

図1：児童Cの最終ワークシート

図1の児童Cのふりかえりから、これまでの学びをいかし、家族のために、コースターを製作した。家族とのやりとりの中で、どのようなコースターを作ればよいか、形や大きさ、どのように布

を縫い合わせていけばよいか、イメージを膨らませながら取り組んだ様子がかがえる。また、家族の方からは、「きれいにできたね。また作ってね。」と製作過程やコースターに対する愛情溢れるコメントが書かれている。自分が作ったものが、家族から喜ばれ、また作ってみたいという思いを高めることができた。このように、日常生活で実践しようと思いを高めることができた経緯を、本題材で大切にしてきた2点を踏まえて述べていく。

(1) 子どもに実践への意欲を ～必要感をもって、知識や技能をいかす工夫～

本題材の製作活動では、子どもたちは作りたい物を各自で考え、作るための計画を立てた。以下に示すワークシートは計画表と製作過程におけるふりかえりである(図2, 図3)。

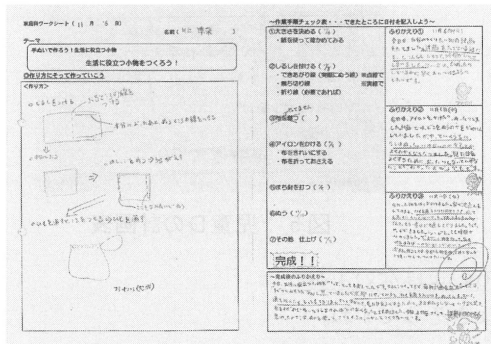


図2：児童Cの1回目の計画表

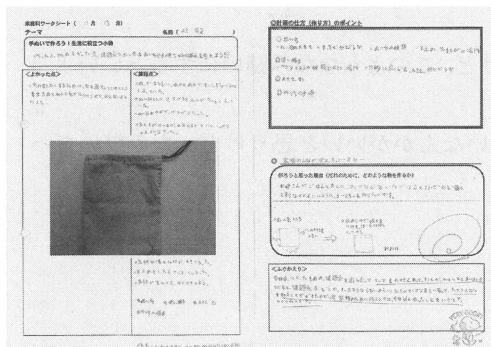


図3：児童Cの完成した小物の見直し

子どもたちは、まず、作りたい物を考え、大きさや形を決め、頭の中に素敵な小物を思い浮かべる。しかし、いざその小物の作り方を計画表に書こうとすると、難しい。大まかな作り方は理解しているものの、本当にこれのできるのだろうか、ここは実際に縫ってみるとどうなるのだろうか、課題ができる。そして、実際に製作する過程では、作り方の順序や印の付け方や縫い方などさらに課題ができる。児童Cは、計画を立てながら混乱し、縫って行く中でどのように縫えばよいか発見し、失敗しながらもなんとか完成し、小物をつくる時にどこを縫えばよいか気を付けなければならぬことが分かったと記述している。子どもたちは、製作における課題を見いだしたときに、挫折感を味わうのではなく、むしろ、課題解決に向けて、試行錯誤していこうとする意欲をもって取り組んだ。このことが、これまで学習して身に付けてきた知識や技能をどの場面で、どのように活用していけばよいか、必要感をもって具体的に考えることができたということにつながった。作り方を見ながら、その通りに作る学習では得られない、知識と技能をより実生活への

実践に濃く結びつける学びを展開することができたと考える。

そして、図3では、一人一人が完成した小物について、製作の過程や完成した物を見直し、よかった点と課題点を整理した。児童Cは、縫い目についての課題を多く見付けた。図4に示すように、その課題を学級全体で出し合い、改善点を整理していった。

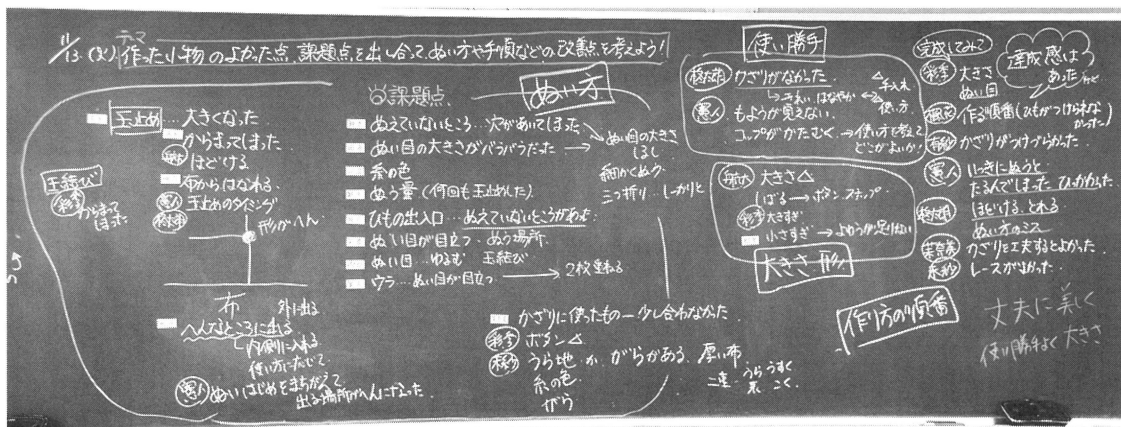


図4：小物作りの良かった点・課題点をまとめた板書

(2) 学んだことを家庭へ ～これまでの学習をいかす話し合い活動～

小物作りで高めた意欲を、実生活へつなげるために、本題材の最終時として、家族のためにつくる生活に役立つものの具体的な計画を立てていった。以下に示すのは、これまでの学習をいかす話し合い活動の場面の授業記録である。図5の児童Dの計画表を学級全体に提示し、児童Dにアドバイスをすることを通して、自分たちの計画の見直しを行った。

～計画表の内容を児童※の説明とともに全体で確認していく～

T 1：アドバイスがあれば教えてあげて。

児童E：クッションが入るので、大きめに作るとよいと思います。

T 2：具体的には？

児童F：プラス3cmぐらいかなあ。もっと余裕をもたせた方がいい。

児童G：具体的には言えないけど、クッションの高さがある。

T 3：高さってどういうこと？

児童H：厚みのこと。クッションには厚みがあるから、きついとパンパンになる。

児童D：中に入れるクッションは薄めなんだけど…。

T 4：薄いとはいえ、ぺらーっとした布と布を縫っただけというものではないよね。

具体的な厚みは分からないけど、そこはもう少し考えてもよさそうですね。

他にはないですか？では、縫い方で見てみよう。どうですか？

この1cmってどういうことですか？

児童D：1cmは縫い代で、そこはなみ縫いで縫います。

T 5：Dさんがどこをどう縫うか分かったね。では、なみ縫いだけけど、このようななみ縫いにするといいよっていうアドバイスないかな？

児童I：細かく縫うといいと思う。丈夫に縫うんだったら本返し縫いなんかがいいと思うけど、なみ縫いだったら、細かく。あと、2本どりで。

T 6：ちなみに、みんなの中の細かいなみ縫いってどのくらい？

3cm？ものさしを見て考えてみてよ。

児童J：5mmぐらい。間も狭くするといいいんじゃないかな。

児童多：4mm！2mm！8mm！

児童D：それは大変そうだなあ。

児童多：前に縫った時の縫い目は大きい！1cmもある！

T 7：では、他はどうだろう？もし、ししゅうというか、飾りをつけるとしたらこの手順でいくとどこで付けるべき？

児童多：縫う前！ひっくり返すとき！

児童多：わあ、縫った後だと作りにくい。

T 8：いろいろ具体的なアドバイスが出てきたね。これらを参考にして、もう一度自分の計画表を見直してみよう。

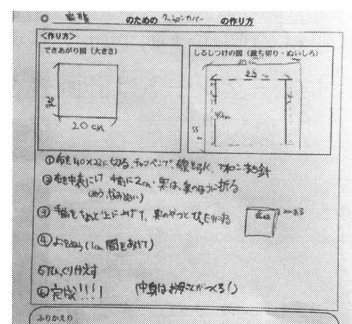


図5：児童Dの計画表

子どもたちは、これまでの学習を通して、具体的な計画が立てられるようになってきた。児童Dの計画表からも分かるように、手順や大きさも具体的である。しかし、よりよい計画表にしていくためには、もっと丁寧に考えていった方がよいところもある。例えば、『細かいなみ縫い』という言葉である。なみ縫いを丈夫にするために、細かく縫う必要性をこれまでの学習の中で子どもたちは感じとった。しかし、その細かさの具体的なイメージは十分でない。そこで、T6にあるように、細かいとは、具体的にどのくらいの針目のことをいうのか掘り下げて確認した。2mmから8mmまで、その細かさのイメージは子どもによって違う。しかし、学級全体でその細かさを考え、これまでの小物作りを振り返り、1cmでは大きい縫い目になると確認したことは、より子どもたちの製作しようとしている物に応じた縫い方を考えることにつながった。T3の高さについて聞き返した掘り下

げも、製作しようとしているものやその作り方をより具体的にイメージすることにつながった。さらに、掘り下げること子どもたちが考えたことや、振り返ったことを価値付けていくことで計画表の改善に反映されたと考える。表1は1回目の計画を最終時の評価基準と照らし合わせ評価したとき、最終時の計画表の評価を表したものである。子どもたちの計画が製作する物の特徴に合わせて、より具体的になったということがこの結果からも明らかである。図6 児童Cのワークシートはその計画表の変容の実際である。

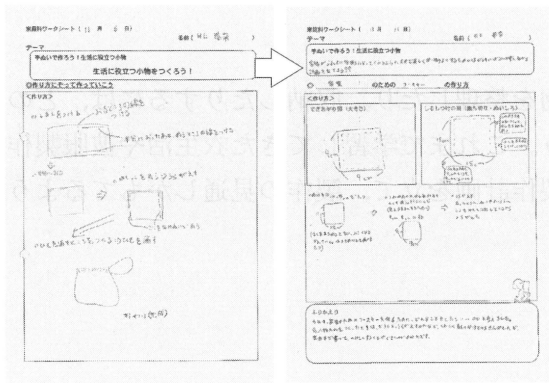


図6：児童Cの1回目の計画表（左）と最終時の計画表（右）

表1：評価基準に照らし合わせた子どもたちの変容

	製作する物の特徴に応じて、形や大きさ、縫い方など工夫しながら具体的な計画を立てることができる。	生活に役立つものを考え、その物の形や大きさ、縫い方などを考えて計画を立てることができる。	自分が作るうとする物の形や大きさ、縫い方などの製作計画があまりないで、具体的ではない。
1回目の製作計画	3人	23人	4人
最終時の製作計画	10人	20人	0人

5 成果と課題

(1) 授業構想について

家庭科の学習において、「学びをいかして日常生活で実践する」ことが最大の目的であると考えられる。そのために、題材の最終時に、これまでの学習をいかして各家庭での実践に向けた具体的な計画を立てる場を設定したことは、家族のことを思い、家庭生活に主体的に関わろうとする意欲や態度を高めることができたと考える。また、このような学習のゴールに向けて、個々で作りたい物を考え、製作していったことは、子どもたちが必要感をもって知識や技能を用いることにつながり、深い定着が図られたのではないかと考える。また、自分で考えた物ができていく喜びを感じながら、課題に意欲的に取り組むことにもつなげることができた。初めて針と糸を用いて製作することと出会う子どもたちにとって、有効な授業を展開することができた。

(2) 教師のはたらきかけについて

4(2)でも述べたように、子どもたちの見つけた課題を認め、その課題を掘り下げ、学級全体で話し合うことで、自分の製作するものに合ったよりよい作り方を見いだすことができた。また、そうすることで意欲的に自分の製作物を振り返ったり、友だちの製作物を観察したりすることで見付けた課題を価値付けることで、最終時の計画に反映させることができたと考える。認める→掘り下げる→価値付けるという一連の教師のはたらきかけを今後も大切にしていきたい。

(3) 評価について

最終時の授業では、子どもたちのこれまでの学習の姿をとらえるために、図7のような評価規準に照らし合わせていった。このような評価をすることで、子どもたちがこれまで身に付けた知識や技能、意欲や態度を踏まえながら、本時の学習における個々の子どもへのはたらきかけを考えることができた。一方で、本時の創意工夫の観点における評価については、評価規準として設定したものが適切であったかどうか、評価の対象として考えたワークシートについて、子どもたちのこれまでの学びの成果や思い、思考の過程を十分表出できるものになっていたかどうか、よりよい評価方法を検討していきたい。
(文責 竹吉 昭人)

図7：評価規準